

災害現場で対処競う

医療チームが「ラリー」

四万十市

【幡多】医療チーム 南海トラフ地震に備えて救命救急現場での対応を競う「メディカルラリー」がこのほど、四万十市で行われた。

救急救命士らが、てきぱきと医療処置などの



地震による橋の崩落現場で連携を取る医療チーム(四万十市右山の四万十消防署)

判断を下した。

幡多地域の病院や消防署の主催で、昨年以降2回目。約40人が8チームに分かれて各現場を回った。15分の制限時間内に情報を集めて状況を把握し、治療方法や救急搬送の優先順位などを決めていった。

けが人の数や容体は現場ごとに違う。同市右山のサンリバー四万十は被災7日目の設定で、車中泊の避難者らに「エコノミークラス症候群」が疑われた。近くの幡多医師会館は余震で天井が崩れる想定で、けが人を置いて避難するかどうかの判断を迫られた。

大月病院(幡多郡大月町)の筒井崇医師(30)は「傷病者が多数いて、物資や受け入れ先の病院も足りなかつた。普段は救命士と連携することがないの

で、収穫があった」と感想を述べた。医師や看護師が、消防隊員らと交流を深めることも目的の一つ。幡多けんみん病院(宿毛市)の片岡由紀子医師(51)は「救急医療は病院ではなく、現場でスタートする。災害では所属を超えた協力が必要で、顔の見える関係が大事」と話していた。

ラリーには、高知市や愛媛県の医療関係者を含め、けが人役やスタッフなど計約250人が参加した。

(早川 健)

断を迫られた。

大月病院(幡多郡大月町)の筒井崇医師(30)は「傷病者が多数いて、物資や受け入れ先の病院も足りなかつた。普段は救命士と連携することがないの